



2枚引き戸を開放すると洗面所とトイレが一体となり、車いすでも使える空間が生まれた



改修前

改修後

浴室・脱衣室・トイレを引戸で仕切り、車椅子での移動をスムーズにした

1つ目は生理機能の低下です。肺活量の低下や頻尿、失禁などがあげられます。対策としては手摺を設置することや、トイレを寝室の近くに配置することなどがあります。

2つ目は運動機能の低下です。関節の痛みや歩行困難、骨折しやすくなることなどです。移動しやすいように寝室を1階に移す、階段の勾配を緩くするなどの対処方法があります。

3つ目は感覚機能の低下です。視力の低下、温感の低下などがあげられ、照明を明るいものにする、床暖房を設置するといった対策があります。

4つ目は精神機能の低下です。記憶力や環境適応力の低下などがあります。どんなに便利な設備をつけても使えなければ意味がないので、簡単な操作方法の製品を選びます。

どれも当たり前と思うかもしれませんが

また、同居するご家族がいれば、その人たちが快適に過ごせる家になければなりません。以前、車椅子生活の娘さんと母親の2人で暮らす家をリフォームしたことがありました。その親室は同じ寝室で寝ていたのですが、私は娘さんの部屋の隣にお母さん用に4畳の空間を提案しました。先方から1人で寝たいとか、1人の時間が欲しいとか言われたわけではありません。一生懸命介護をする人にとって、こういうことは第三者のアドバイスによって気づかされるものだと思います。

リフォーム後、もともと社交的なお母さんは友だちとの交際を広げ、より明るくなったそうです。娘さんもそんなお母さんの変化を喜んでいました。

高齢者住宅を経験したことがない設計者にとって、ほかにも最低限押さえておきたいポイントはありますか？

加瀬澤 まず床をフラットにすることが基本でしょう。特にサッシのレール上で車椅子を方向転換させるのは難しいので、ノンレールサッシを使いたいですね。あとは建具を引戸にすることです。これも車椅子生活をする人には有効です。そして何より注力していただきたいのが、水廻りに広いスペースを確保することです。

基本的にはトイレ、脱衣、洗面の空間を一体化します【写真1】。これによってそれぞれの行為がスムーズに行えます。このスペースの確保が難しい場合は、トイレのスペースを、そこにつながる廊下を含めて考えることです。車椅子は直角に曲がるのが苦手です。だから寝室とトイレの出入口を直線でつなぐ【写真2】、またはトイレの出入口を2枚引戸などにして大きく取り、斜めからでも入れられるようにするといった方法をとります。

障害のある人とならない人では、段差の認識の違いもあるようですね。

加瀬澤 障害のない人は、段差と聞くと3cmくらいを想像するかもしれませんが、しかし車椅子で生活をする人にとっては3mmの段差でも乗り越えられ

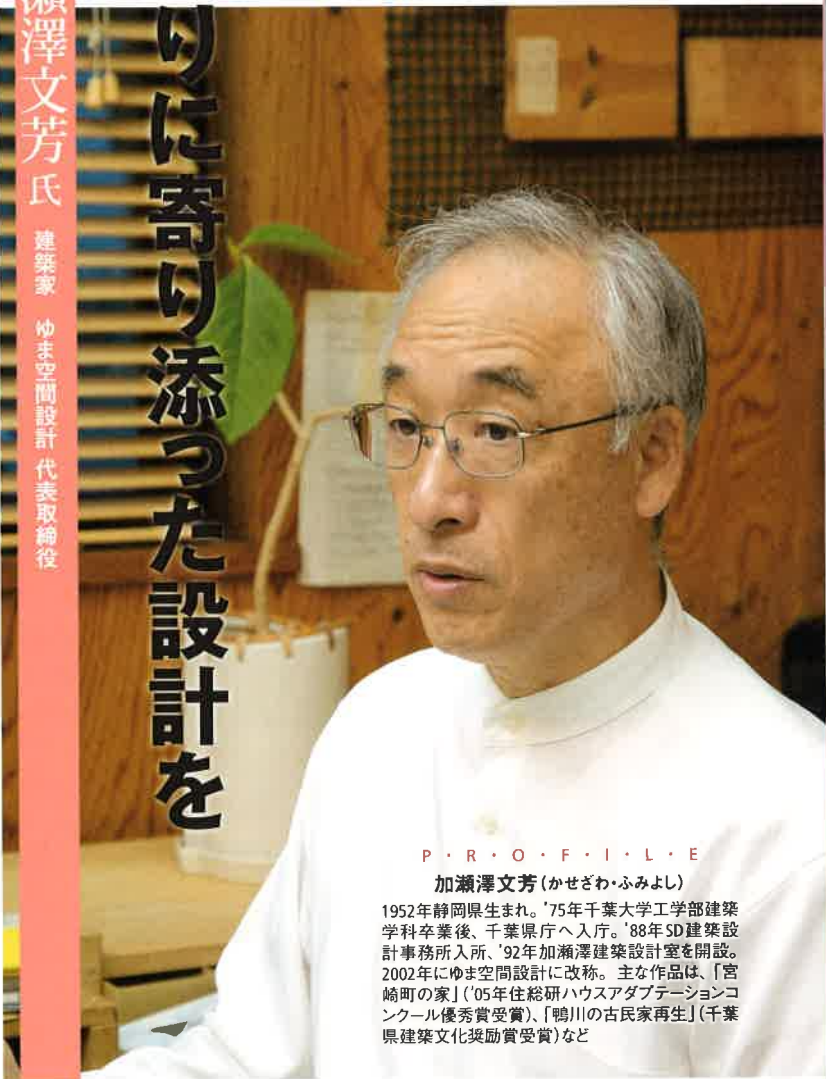
写真提供：ゆま空間設計

徹底解説

高齢者住宅「インタビュ」加瀬澤文芳氏 建築家 ゆま空間設計 代表取締役

高齢者一人ひとりに寄り添った設計を

わが国の人口が年々減少するなかで、高齢者が占める割合は増加の一途を辿っている。今年(2013年)は4人に1人が高齢者となり、2035年には3人に1人となるという試算も公表されている【※】。今後の住宅業界にとって、高齢者住宅は避けることができないテーマの1つだ。高齢者のための住宅に必要な設計手法とはどのようなものなのか。高齢者・障害者住宅の設計に長く携わってきた加瀬澤文芳氏に、四半世紀以上にわたるノウハウのイロハを聞いた。



P · R · O · F · I · L · E

加瀬澤文芳 (かせざわ・ふみよし)

1952年静岡県生まれ。'75年千葉大学工学部建築学科卒業後、千葉県庁へ入庁。'88年SD建築設計事務所入所、'92年加瀬澤建築設計室を開設。2002年にゆま空間設計に改称。主な作品は、「宮崎町の家」('05年住総研ハウスアダプテーションコンクール優秀賞受賞)、「鴨川の古民家再生」(千葉県建築文化奨励賞受賞)など

高齢化が急速に進むなか、高齢者が安全・快適に暮らせる住宅が注目されています。

加瀬澤 日本のなかでも特に私の事務所がある千葉県は高齢者の増加率が高く、全国で2番目です。そのため、一人暮らしや夫婦のみのお年寄り世帯をたくさん見てきました。

家庭内で起きる死亡事故のうち、65

歳以上が占める割合は約80%です。今後、高齢者が安全に暮らせる住宅のニーズはますます高まるでしょう。

高齢者住宅に取り組みようになっ

たきっかけは何ですか？

加瀬澤 大学を卒業してすぐに就職したのが千葉県庁でした。そこで養護学校(現特別支援学校)の建設に携わったことが大きな転機になりました。建

築に対する自分のそれまでの価値観とはまったく違うものを感じました。

たとえば、照明のスイッチは床から130cmの高さに設置することが当たり前だと思っていました。養護学校では100cmなのです。これなら車椅子の人でも小さな子どもでも手が届きます。常識がくつがえされ、住む人に応じて設備や配置を変えなければならぬという

うことに衝撃を受け、それがきっかけで建築事務所へ転職することになりました。

高齢者住宅を設計することで気づいたことを教えてください。

加瀬澤 まず高齢者ならではの身体機能の低下を理解したうえで設計しなければならぬということです。ポイントは大きく4つ挙げられます。

取材・文=椎名前太 人物撮影=岡田尚子

※ 内閣府の「平成25年版高齢社会白書」参照